

## 論文の和文要旨

論文題目： 太宰治における時代と文学の問題—中期を中心に—

氏 名： 金 京淑

本論文の研究対象である太宰治の中期作品は、日中全面戦争と太平洋戦争という時代を背景として書かれたものである。本論文は、中期の太宰治が戦時という厳しい状況の中で、一人の文学者としてその時代とどのように向き合っており、いかなる文学的な営為を行っていたのか、同時代の文脈を参照しつつ、その様相を浮き彫りにすることを目的としたものである。

本論文の一つの課題は、まず、中期作品における表現上の戦略を明らかにすることによって時代に対する文学者としての太宰の在り方を再確認することである。太宰文学における従来の研究は、主に後期作品が中心となっており、中期文学を一つの方向性をもってまとめるような研究はあまり行われていない。ことに太宰の中期が戦時体制をその背景としているにもかかわらず、戦時という時代とのかかわりの中で中期文学の全体像を見渡そうとする研究は非常に少ない。もっとも、太宰と戦争との関係を言及したものは枚挙に暇がないが、多くの場合、太宰は「私小説作家」として戦時という現実とはかけ離れた場所に立っていたのであり、時代との関係においても傍観的であったが故に、結果的に中期作品には戦争の影が希薄だとするものである。確かに、中期には前期とは異なり自分の体験や感覚を作品に盛り込むことをあえて表明しつつ、〈私〉の精神を裏付けるような私小説的作品を数多く書き出している。しかし、それが戦時下の〈公〉の支配論理の中で自覚的・意識的に行われていたことは、更なる検証を必要とする問題である。実際に、太宰の中期作品には戦時体制の政策の推移や文壇の動きを冷静に捉えつつ、それを反映して書き上げた作品が決して少なくない。それらは、戦時体制によって表現の自由を奪われた現実を生きる作者が、その厳しい状況の中で、「自分の旗を守りとほす」ための様々な工夫と戦略を施しつつ、生み出したものである。そこには道化や滑稽化、寓意、暗喩などの文学的表現により数々の戦時下の政策が取り上げられ、批判されていること、戦時体制の発する言語イデオロギーが次々と相対化されていたことを見逃してはならない。

本論文におけるもう一つの課題は、中期の「女性独白体」小説に対する検討である。太宰文学における〈女語り〉は中期文学の欠かせない主な特徴として見なされていながらも、これらの作品に対する従来の研究は、作者自身の女性的な部分や作者の女性観に関連付けられ、断片的に言及されており、その文体の創出の背景や有効性、その文体による作品の

全体的な方向性などに関する研究はほとんど行われていない。しかし、中期の「女性独白体」作品は時代との関係の中できわめて意識的に作られたものであって、そこには当時の作者が抱いていた時代と文学の問題が多様な形で投影されており、それを表現するための様々な戦略が施されている。本論文では、「女性独白体」小説の全体像に貫かれている一つの方向性を導き出し、これらの作品の持つ性格を明らかにすることを試みた。

まず、第一章では、戦時の太宰が時代と文学、政治と文学の関係をどのように捉えていたかを理解するために同様の問題意識を強いられていた習作期を研究対象として取り入れた。ここでは、「他者」とのかかわりの中で自覚せざるを得なかった弱者としての自己意識、コミニズム思想に強いられる政治性と自己の目指す文学との相克意識、転向の特異性などを検討した。文学を自己表現の場として捉えていた太宰は、コミニズム思想にしたがってプロレタリア文学的な作品の創作を試みるものの、常に個人としての自己の感性に主眼を置いていたため、政治主導的なプロレタリア芸術理論との乖離を自覚せざるを得なかった。それは太宰が文学においては自分の主体性を守っていたことを物語っている。

第二章では、戦争という時代と密接な関係にある作品を取り上げ、戦時下の太宰がその時代とどのように関わりながら、何を表現していたのかを検討した。まず、昭和17年までの作品のキーワードである「待つ」という表象に籠められた真意が「平和」であったこと、作者が自分の「ものを見る眼」を守りながら、時流に呑み込まれまいとする意志を、「待つ」という一つの姿勢を通して表現し続けていたことを明らかにした。昭和18年以後の作品における「奴隷の言葉」の出現の背景やその真意を探り、それらは表層的なものに過ぎず、言葉の裏側に真意を伝えようとする戦時下の戦略は依然としてつづけられていたことを指摘した。また、太宰の作品に語られている「兵士」は、現実の戦争遂行者としてではなく、戦争の犠牲者として捉えられており、もっぱら「国のための」献身のみを強要する戦時体制の価値観が相対化されていたことを考察した。また、戦時体制を支える〈公〉の論理が支配的秩序を形成し、私小説作家であるが故に非時局性を非難されていた時代に対して、『私』精神を打ち出しつつ、あえて私小説家であることを表明する作品を書き続けることによって文学者としての主体性を浮かび上がらせようとしたことを明らかにした。

第三章から始まる第二部では、「女性独白体」小説の方向性とそれらの作品における戦時下の太宰の表現戦略を検討した。まず、第三章では、作品『女生徒』の表出を成り立たせた有明淑の「日記」の存在を取り上げ、この現実の女性の声が発せられた「日記」が、以後の「女性独白体」小説における女性像の造形にどのような影響を来たし、逆に太宰はその「日記」の女性の声をどのように反映し、作品の性格に持ち込んでいたのかを明らかにした。その中で造形された、〈性〉をめぐる「不潔な女」像には、当時の制度・政治・教育によって価値づけられた女性像を内面化する過程で必然的に生じる現実の女性たちの苦悩の声が反映されていた。作者はこの「不潔な女」像を戦時下のほとんどの「女性独白体」小説に登場させていたが、それは戦時下での家父長制や良妻賢母イデオロギーを真正面から否定するものに他ならず、この点にこそ太宰の中期文学における「女性独白体」作品の

一つの方向性があったことを指摘した。

第四章からは、「女性独白体」による小説の個別の作品論である。第四章の『燈籠』論では、「女性」が太宰文学において新たな表象手段として登場するようになった背景やその女性に籠められていた当時の作者の文学的なテーマを明らかにした。また、『燈籠』は、「芸術の重大の岐路」に立たれた作者がそれまでの前期的作風から脱することを志して書き上げた作品であり、こうした作風の転換には作者の個人的な要因のみならず、芸術そのものと芸術者としての自己のあり方を問う、文学界全体に関わる外的要因が強く働いていたことを検討した。その岐路で作者が選択したものは、「一人の民衆としての自己」という社会意識であったが、それは『燈籠』の「私」を規定する言葉—「変質左翼少女」に象徴されていた。

第五章の『皮膚と心』論では、昭和14年代の文学界の動向を踏まえつつ、作者の戦時体制に対する姿勢と表現の自由を図るために選び取った戦略を明らかにした。この作品を創作するにあたって、女性をめぐる多くの時局的な素材を提供していたと思われるものとして、『婦人公論』の昭和14年9月号を取り上げて、この作品の制作における影響関係を確認した。また、作者がその雑誌に表れている女性をめぐる国策や言説を次々と取り上げながら、それに相反する主人公の言動を通して時局の諸々のテーマを相対化していく有り様を検討した。この作品に表象されている「愚かな」女性像は、時局によって正常化され、一般化された良妻賢母の女性像を反転させるものに他ならず、作者が時局の女性教育言説をそっくり逆手にとってそれに相反する女性像を提示していたことを見ることができた。また、時局の政策や言説を正常的なものとして前景化する一方で、異常さと懺悔をもってそれを相対化していくアイロニイ的な手法が検閲を避けるために選び取られた戦略であったことを明らかにした。

第六章の『きりぎりす』論では、昭和15年の「新体制運動」によって全体主義へ押し流されて行く現実にも否を唱える作者の文学者としての批判的な眼差しを確認することができた。この作品の女性は「私」という個人の考え方にしたがって、個人としての自分の人生を生きようとする個人主義・自由主義的価値観を持つ人物であった。作者はこの女性に自分だけが正しいとするエゴイストの女性像と戦時体制にふさわしい清貧な女性像を同時に付与していた。時代の中で矛盾する、この二つの女性像のバランスを保つことによって検閲者の判断を惑わせつつ、主人公の女性の生き方に暗示されている〈私〉的な部分を表象化することが、この作品で選び取られた戦略であったことを明らかにした。

第七章の『十二月八日』論では、太平洋戦争開戦日の〈十二月八日〉という対象に対する作者の文学者としての批判精神がどのように表出され、その対象に対する自己の感覚を盛り込むために如何なる手法が講じられていたのかを検討した。その中で、開戦日を題材としながら、戦争目的を滑稽化することによって戦争自体を相対化し、「家族国家共同体」から逸脱した人物を描くことによって時代に対する作者の意識を表出しようとしたことを指摘した。それを表現するために作者が選び取った戦略は、非論理的な「無邪気」な女性

の取りまとめのない言葉として仕立て上げ、対象を語りつつ、同調と逸脱を反復していくことによって言外の意味を作り出していくことであった。

以上のように、中期の太宰は常に戦争という時代を問題とし、迂回的な表現・手法を工夫しつつ、戦時体制の支配イデオロギーを相対化するような作品を書き続けていたのだが、そこからは自分の感覚に正直になることによって強烈に押し寄せてくる時代の流れから自己の文学を守ろうとした、太宰の表現者としての主体性を確認することができたと思われる。